平安中期女流私家集の共通項

――私的世界の対象化と認識――

広田　収

古代において文学は、共同体の生活の場において呪詞が、民衆の集団の場においてウタが、神や天皇に対する氏族の服属儀礼の場においてカタリが胚胎してくる。文学は未分化のままつねに集団とともにオーラルな言語として存在した。こうした事象に対して平安時代には最も際だった形態で文学が発生した。

几帳のかげに『源氏物語』の五十四帖をくりひろげて、日もすがら耽読するよろこびを、「后の位も何にかはせむ」と書きしるした『更級日記』の作者は、期せずして新しい文学精神の世代を宣言したのである。（中略）この事実が文芸はすでに文字に呪縛されたのであることを物語っている。

（風巻景次郎氏「中世和歌史」『全集7巻』11頁）

それは書かれた文学を至上とする価値観の提示だといってよい。念を押してこれに加えるならば、「人もまじらず」几帳のうちのわずかな空間――自分ひとりだけの世界に閉じ込められた――の中で「読む」という強烈な文学行為が孝標女個人のうちに発生した、ということである。もとよりこのような個的な文学が、古代の文芸のもっていた共同体の精神的紐帯を喪失していく契機となったことは事実である。摂関政治の状況の進展と頽廃とが、作者や読者の対決すべき問題の場を最も狭いところにまで追い込んでいったということにはちがいない。そしてその内質は、書物に向き合って伏した周囲のわずかな空気だけの世界で、おほけなくゆゆしき禁忌違反の所業である源氏物語を読む、という文学の世界である。

(1)　物思ふ――女流歌人の孤独

人しれずものおもふ事ありける女の、なげかしかりけるまゝに、おもひけることよ

つらからん人をばなにかうらむべきみづからだにもいとはしき身を　（思女集）①

「もの思ふ」とか「眺む」という女の姿勢は今まで平安朝貴族女性の典型的な形姿である、と漠然と考えられてきたし、平安朝女流文学もまたその姿からの連想において詠嘆的という形容で印象づけられてくることが多かった。「ものおもい」の語意は、「物事を思うこと。思いにふけること。また、思い煩うこと。心配。うれい。悩み。」②であるとされている。源氏物語の例では恋の悩み・夫婦間の悩みが圧倒的である。だが古今集での例のうち、

題しらず　よみ人しらず

221　なきわたる雁の涙やおちつらむ物思ふやどの萩のうへのつゆ　（角川文庫62頁）

この221の「物思ふ宿」は私家集の世界に通じるものである。「物思ふ」とは何かがその胸に秘められていることで私的であり、開かれねばわからないものであるが、秘匿されているゆえに意味をもつものである。それは一種の悪の魅力である。女流私家集にこうした「物思ふ」が夥しく指摘されることは重要である。ここに私家集のウタの性格と勅撰集のウタの性格とのひとつの対比がみられるであろう。私家集の抱えている内的世界は物思いであり、嘆きであった。

更級日記の作者が源氏物語に魅了され、夢多き少女時代から記し始めた日記の末尾に、

年月は過ぎかはりゆけど、夢のやうなりしほどを思ひいづれば、心地もまどひ、目もかきくらすやうなれば、そのほどの事は、またさだかにも覚えず。人々はみなほかに住みあかれて、古里にひとり、いみじう心細く悲しくて、ながめあかしわびて、久しうおとづれぬ人に、

しげりゆくよもぎが露にそぼちつゝ人にとはれぬ音をのみぞ泣く

尼なる人なり。

世の常の宿のよもぎを思ひやれそむきはてたる庭の草むら　（岩波文庫70頁）

と心も消え入るばかりに自分ひとりになってしまった晩年の思いを記している。そうした悲しみの中でわざわざ回想を辿って、日記を書かずにはいられない状況はここに端的に示されているのである。それは「古里にひとり」いるということである。孝標女のようにより孤独に文学に対峙する時代にあってはそのことがより強く意識されてくる。中古の「ふるさと」は女たちにとって惨めな現実を「わが宿」の荒廃によっていやが応にも明らかに知らされる場所である。蜻蛉日記の作者も母の死、頼もし人父の下向、夫の夜離れ、と自分がひとりに取り残されていく中でウタを記し日記を書いている。③

孝標女も母を亡くしていたことでは同じだった。西郷信綱氏が、

紫式部という女は、若いころ何か決定的なものを生活のなかで失い、それを極として逆に生きてきたような女であるらしく思われる。それが夫宣孝との死別からくるのか、かれとの結婚そのものからくるのか、またはいわゆる受領の娘の経験からくるのか、何ともいえない。④

と論じておられるのは、およそ紫式部だけの問題ではないのではなかろうか。それは他の女流日記・私家集の作者たちに共通した出発点ではないかと思われるのである。女たちが物語を書くか日記か家集かというジャンルの差異は、主として書くに至る個々人の状況や文学経験の差異などに基くのであって、ジャンルが当初から目的的に据えられて書かれたかどうかは疑わしい。むしろジャンルの枠を取り外してみると、思いがけなく平安朝の女たちの文学が直面していた状況が明らかになってくるように思われる。

南波浩先生は「私家集の形成過程⑤」について、その例のひとつとして「思女集」「相模集」につき、自撰家集「相模集」から流布本「相模集」への展開過程を考えておられる。そこで指摘されることは、この展開には「歌風歌詠を後に残したいという文学的欲求」の契機と「感情の浄化」という内的要因が考えられるとされている。先生の指摘されるところによると例えば、

いとわればかりとのみ覚ゆるあづまの杜（あつさ）にくち果てにける深山木を（傍記私家集大成浅野家本流布本相模集冒頭）⑥

の傍線の部分に、夫大江公資を失った事実が反映している。私はここではこの冒頭部分において流布本の展開の中で明らかにされた「いとわればかりとのみ覚ゆる」という点に注目したいと考える。他の女とは違ってこのような不幸に出会ったのは自分だけなのだという強い確信⑦がその底にはあるのだということである。ではなぜ、相模は自己を「物思ふ女」と規定しなければならなかったのである⑧か。夫を失って以後、彼女に置かれた失意の生活、夫在世中には夢想だにしなかった悲嘆の日々が、

小高き陰もやとたのみしおりは残りゆかしう花もみぢ雨かぜにつけてもおのづから散る言の葉をかきをきたらば（中略）せきとゞめてしをあいなう袖に涙のかゝりける身にと思ひしられはてぬる折しも……（浅野家本異同ナシ）

という表現には和歌的表現をとりながらも滲んで見えるのである。こういう経歴をもつ女は多かった。和泉式部も夫の死に出会った女である。

紫式部や、紫式部日記の記す小少将の君などと同様に、夫や父を失えば女は生活のために家の姫君でさえ女房として出仕するという屈辱の生活の道しか残っていないという現実があるのであった。和

泉式部が召人として宮に出仕せざるをえなかったように、出仕のしかたに差異はあってもこの経歴の類似は多い。

和歌的表現すなわち詠嘆的姿勢、という混同は断じて慎しまねばならない。米沢勝代氏が晩年の相模には「歌合等にも見られるような表面華やかな宮廷生活とは対照的に、夫との離別、頼りとする子どももいない淋しさが、老いゆく身にはひしひしと感じられたに違いない」[9]とされている。そうであってこそ家集が創り出されえたことは肯えるのである。流布本相模集の過半を占める歌群に「彼女の心の翳」[10]をみてとったのは犬養廉氏であった。流布本相模集の末尾近くには、

あやしくほいなくて登るほどちかくなりて（浅野家本異同ナシ）

とあって、相模も望んだわけでもなく出仕を余儀なくされたことがあったらしいのである。伊勢から後の女流作家たちは道綱母や賀茂保憲女を除けば出仕の経験をもつ。そしてそうした近親の死、望まぬ出仕という人生の転換が「物思ふ」ことを誘い出したのであった。「物思ふ」とは何となくぼんやりしていることではなくて、生活の方策の悩みも含まれていたのであり、「あいなう袖に涙のかゝりける身にと思ひしられはてぬる（浅野家本異同ナシ　群書類従相模集）」運命の思惟にまで至る認識の道でもあったのである。

私家集や日記の比較で明らかになる形成過程の類似性は次のような点である。まず、女たちは、ひと知れず自己の人生が他人とは違う、呪われた人生なのだという強い主観的判断を持っているということである。夫や父が死ぬということ、家族を失う「孤独」は前世の犯しの応報であるとされ[11]、先の世の業・拙き宿世をもって生まれてきたと考えられていた。そのことは観念的にそうであるだけでなく、夫や父が生きている間彼女たちが温く育まれていた家の胎内から、経済的にも世界観の上でも一挙に世の中に曝されることによって、女たちは平安朝の時代矛盾を背負い込まざるをえなくなったのである。したがって、「物思ふ」とはそのような現実に対する諦め難い諦めであり、反実仮想であった。もし、彼女たちの文学において悲しむべき条件があったとすれば、それは他の女たちも自分だけが不幸な人生を送っているのでないということに必ずしも気付いていない場合があった[12]、ということである。自分というものを他人と区別して意識するということは、古代にあってはしかも女としてはきわめて歴史的なできごとであった。

例えば、本院侍従集では[13]、

かくてすみわたり（ナシ）給ふ程に、この女をよばふ（また人の）人ぬすみ（ナシ）もていにければ（28詞書傍記乙本甲本）

と、そのころの色好みのひとり伊尹によって略奪婚とでもいうべき劇的な半生を歩まされたことへのかぎりないいとおしさと、かつて

の夫兼通に対して「あはれと思」わずにいられぬ感情が彼女をとらえていたことであろう。しかも、歌番号12―13の間の地の文（詞書）、甲乙本異同ナシ

さらに人も知らぬことなりけり

には彼女本院侍従が自らの半生を公開することへのときめきが予感されているのである。[14]

人しれぬ恋なきにしもあらねば[15]（賀茂女集冒頭）

「人も知らぬこと」、これこそ女が女である世界をはっきりと感じていた証しであろう。穿っていえばその若い男が「いまはほりかはの中納言（大）とかや」（本院侍従集巻末）（ナシ）として彼女が有名尊貴の人物である兼通のかっての愛人だったとして自ら主張するときめきを、その半生の数奇さゆえに記さずにおけないのである。他の女のような人生とは違うのだという、誇りと老年の境遇の悲哀とに支えられていたということを押えておきたいのである。[16]

賀茂女集ではこのことはさらに明確に出ている。長大で特異な和歌的前文を守屋氏は「家集の序文としては不似合なほど批評的であり思惟的である」[17]とし、彼女は社会意識・政治への関心において「稀有な存在」であるとされている。賀茂女の自己規定は、

- わがごと悲しきはなしとおもふ人
- この世にこそ身をやつし、人と等しからね

等々。彼女には出仕の経験はなかったらしいし「表面的な歌壇活動こそなかった」[18]が、この女も他の女流作家たちと同じように、自己を他の人間と同類の範疇に入らぬ人生をもつものだと思い込んでいるのである。「このかなしき身の上は保憲女に一貫した発想」であり、「不幸意識の深刻さ」においても人に劣らないことは小町谷照彦氏のいわれるとおりである。

それでは彼女たちはどのように自己を対象化していったか。確かに自己の記録を紙の上に移していくことが客観的には自己対象化であるといえるにしても、彼女たちの意識面での自己対象化ということでいえば、それは自分だけが悲しく惨めな運命の下に生きているといった先入観から抜け出て、受領女の普遍的現実がそういう人生の形を取らせているということを認識することでなければならなかった。その点で重之女集の、

いへば世のつねのことゝや人はみむ われはたぐひあらじとおもふを

や思女集巻末、

人はなにとも（思ふまであやしき）（ナシ） 見まじき事どもなれど（も） 傍記相模集

と、自己の恋を表現していることが注意される。自己の全身的な恋への没入を、他人にとってはきわめて平凡なことであるが、とわざわざ断っていること、と同時にそこにまた彼女なりの青春があるという、その点においてウタが彼女自らの表現となりえたのである。

文学の基となる、人間の存在形態が類同であることの両義性はまさしくここに存するのである。

(2)「類」と女――表現の慰撫と無効性

類よりもひとり離れてしる人もなくなくこえん死出の山道
（和泉式部集[19] 309）

この和泉式部の歌には古代人が個我意識をどのように感じていたかということが端的に表されている。つまり死とは「類」という共同体から離脱することの恐怖である。それでは「類」とは何か。「類」を形成している紐帯とは何か。それはやはり母系制というべきであろう。

近親の死に直面して、彼女たちが家族との紐帯から切り離されたとき、あるいは「仲らひ」の破綻に自己を発見したとき――ということは白い紙に向かう個人の発見と自覚をどのような思惟の中で捉えたかということでもあるのだが――そのとき文学的営為は男を対象化しつつ自己救済を求めていくのである。

彼女たちの文学営為は、一面では男性貴族の漢文日記のように「家」の回復行為であった。例えば蜻蛉日記上巻は私家集的だといわれてきた。その冒頭「かくありし時過ぎて」は読者も作者の生活をよほどよく知っている人であるとされるのも、日記が文学として自立していないことを表すばかりではない。日記が家という次元の枠をもつ文学営為であることをも示しているといえるだろう。

表現の問題を別にしても、秋山虔氏が清少納言の逸話を論じて、なぜ彼女が歌を歌わないのかと中宮に聞かれて、歌人元輔の娘であるがゆえになまなかな歌が歌えなかったという清少のことばに注目されている。[20] ここからも、彼女の栄光ある「家」が彼女にどれほど重くのしかかっていたかを想像することができる。それはしかし清少ひとりの問題ではなかった。米沢氏は和泉式部と相模とがオバ・メイの姻戚関係であったことを論証したあとで、「大江一族からは赤染衛門が、中臣家からは輔親女である伊勢大輔が浮かび、奇しくも平安中期の代表的四女流歌人には姻戚関係のある事が明らかになってくる[21]」と結んでおられる。そうすると紫式部集が歌よみの家『名だたる宿』が『見どころもなきふるさと』に変移する跡[22]」を見せていることは無視できない、家集形成の基本的条件であるだろう。

それでは、そのような家を代表する文学営為の中でウタは彼女たちに対してどのような意味をもっていたのだろう。一方ではウタで「つれづれ」や「物思ひ」を歌うことによって慰撫され救済される方向にあったということである。鈴木一雄氏は和泉式部においては「つれづれ」「はかなさ」をまぎらし脱出する行為として物詣も恋も宮邸入りも存在したといわれる。[23]

にもかかわらず彼女たちは自分たちのウタや文学営為の無効性をまことに強く感じていたらしいのである。重之女は集の冒頭文の中で、「歌のかずにはあらねど」と謙譲ともみえる姿勢をとりながら、おのが恋を同時に「人に語らまほしきころかな」と歌うのである。歌の数ではないと抑制しつつ自己を主張している。こうした表現への戦きや怖れなどの屈折は賀茂女集において顕著である。賀茂女集は「心ひとつになげき」「人しれぬ恋なきにしもあらねば」と書くが、

おもしろきことを心にこそおもへ、誰にかはいはむ、めづらしきことをいひいだしたれば、誰かしらむ、（傍記群書類従本）

と屈折していく。語って聞かせる相手がいるはずもないとしつつ「誰かしらむ」と叫ばずにはいられないのである。守屋氏は「序文全体に漲る粉飾」に「自負と高慢」[24]を見ておられるが、私はこの屈折に伝えるすべのない賀茂女の悲しみを見る。誰も知らぬ秘めごとだと言いながら、その内容について公然と記している。彼女たち以外のものに読まれ愛誦されることを期待していていないような構えをもつ。「もし思ひいでん人もしあらば人知れぬ形見ともなれかしとてなん」（傍記浅野家本流布本相模集群書類従）という言いざまには、他人に対して訴えたいにもかかわらず人には認めてもらえないのではないかという不安が覗えるのである。こうした屈折は他の私家集にもみられる。「心のうちにのみこめたりしこと」（相模集巻末）があって、それを「心にこめてなにゝかはせむ」（同）、「人に見せんこそあさましけれ」（浅野家本592詞書流布本相模集巻末）[25]などと言わずにはいられない女たち。心に籠めた孤独の思い――公開への怖れと誰かに告げたいという欲求との矛盾の中で、女は遣り場なく紙に向かうのである。

むかしより、たかきいやしきはさためときはおりをきけるに、いまはかみにみたれる思ひのまゝに、つゞけむことのはをあかでやはあるべきとて、あるときには夜をあかしかね（傍記群書類従賀茂女集）

時代の疎外状況を固定視して詠嘆しているといってしまえばそれまでだが、そこで「夜をあかしかね」るまでにこだわる彼女の思いがあるのである。そのとき彼女は吉備氏陰陽の家「賀茂」氏の女であるがゆえに、また天文博士の誉れ高かったであろう保憲の娘ゆえにより強烈に、歌うということは、

はるけきゆくすゑをみて、神もゆるさぬことのはを、[26]おぼしきまゝにたのしぶ

ことであった。歌ってはならぬ禁忌を破ってでも歌い出さずにはいられない。物語が神話における禁忌違反という基本的性格を引継ぐものであるとするならば、ウタもまた賀茂女にとってゆゆしき禁忌違反であった。賀茂女が「病中の感懐を記すことを、周囲の人が見たら、不吉だと咎めだてされはしないか」[27]気にしたといわれるが、こ

こに私家集のウタの世界がある。勅撰集においては権威化（神話化）された人物の私事が歌われることは許される。ゴシップがますます権威化・神話化を助長するからである。女たちの私的な境涯や悩みはそれ自体では勅撰集にとられることがない。公的な権威と文芸の規範に関与しないからである。こうした、他のウタの規範として働くことのない私的な思い出や唱和の記録は勅撰集のウタの対極に立つている。

賀茂女は「（ねざめの床のかりの声を）ちりかゝるもみちを、いろを心にみてあはれがり（あはれがりて群書類従）」、四季に慰撫されつつなお「ものおもひまぎるゝことなし」なのである。そしてその思いをウタにして「灰に書きつくれば」なのである。このとき彼女の視線は埋火にだけ向かっている。そこに書き記されている文字は掻き覆えば消え去ってしまうだけの、はかないことばにすぎない。彼女はことばがもともとそういうものだということに気が付いている。これは書かれた文字、ことばの対象化によって可能となった認識だろう。「みすべき人」もないのに書く、という行為から灰に書いた文字に至っては、こうした自分のためだけのことばがあり、これが自己救済の行為として意識的に彼女によって打ち出されたということを示すものである。そのことに気付いていたのは彼女ひとりではなかった。

寝る人を起こすともなき埋み火を見つゝはかなくあかす夜な夜な

という和泉式部の世界でもある。さらにここでは愛すべき男の許にいながら、もはや慰めがたき悲しみに捉われている女の姿がある。これがほんとうの孤独であろう。すでに帥宮在世中に和泉式部が「宗教的な救い」を求めていたということが指摘されている[28]がこれはその孤独に端を発する。

本院侍従集にも、

おとこ

しのびつゝ夢（ながき）のよがすら恋わびて涙の淵とうかびてそぬ（ふ）る

返し

うかびても君はねにけりいかなればいつもおきゐ（つゆと）てなきあかす

らん桂宮本底本のまま

と似たウタがある。このことは彼女たちの類似の経験を表すだけでなく、ことばに対する同じ認識・表現があると考えられる。誇張だけが男の誠意の表現であるのに対して、女たちは男の手の届かない世界をじっと見入っていたのである。

道綱母、賀茂女、重之女、相模、本院侍従、紫式部、和泉式部、伊勢大輔、赤染衛門たち、彼女たちの共通の思い・共通の表現がほの見えてくると、紫式部ひとりを超越的な天才として絶対化すべきではないことがはっきりしてくる。もちろん紫式部が感情の組織者

としてこれらの女たちよりも「進んだ」内的世界をもってはいたであろう。それは次のような差異として現れている。

身のうきを常はしらぬにあらねどもなぐさめがたき春の夕ぐれ
（重之女集）

人にかはりて

恋しさのなぐさむかたもなきまゝに返しぞわぶるよるの衣を
（伊勢大輔集甲本）

という、慰めがたき自己を彼女たちは歌いはするけれども、また一方で重之女は、

わが袖をほすべきほどやいつならん秋はなぐさむこともこそあれ

もみちはみて秋はくらしつ神無月いまはしぐれになぐさまぬかな

と歌っているのである。紫式部日記では、作者は四季の木草花鳥に慰められない[29]ところまで嘆きが深い。紫式部の苦悩は「季節をも越えてしまう」[30]といえるのであって、もはや何にも慰められず、周りの世界が見えず聞えずなってしまえば、彼女には私を助けてほしいという叫びしか残されていない。紫式部以外の女たちには、現実を虚妄とする目が不徹底であった[31]（もしくは紫式部よりも弱かった）ということになるだろう。

(3) 慰むこと——対象化と救済の可能性

伊勢大輔集には独詠歌が少ないため、集だけで彼女のウタの性格全体を云々することはできないかもしれないが、次のような歌、

さまゞの色をばみてし身なれどもきくに心をうつろはす哉
桂宮本底本のまま

なにごともすつる身なれど世の中のえさるまじきは君ゆへとしれ

おくれゐてなにゝかはせむ玉のをのもろともにこそたえなばたえなめ

などからは、彼女にとって心ゆく時、恋しい者のために生きることを喜びとした時があったことがわかる。長野智子氏は「長暦二、三年、五十歳前後で大輔は、父輔親と夫成順を相次いで失った」[32]とされている。神祇の家大中臣の娘が、歌の家としての栄光と悲痛とに彩られて家集を編纂したであろうことは想像される。同じく権貴に献じた集でありながら、異本赤染衛門集は部立が賀歌に始まり、離別・哀傷・無常などの独自の構成をみせている。すべての集を同列に論じることは誤りを犯すことになりかねないにしても、四季・恋の部立による私家集[33]は編集意識において勅撰集の発想に拠りかかっているのである。また古今集のように賀・晴のウタたる性格を併せ

もつことが多い。後撰集入集の女流歌人が権門やその子息たちと交情があり、寛平期から延喜への屏風歌の急増以後、ウタはなまなましい政治のただ中にあった[24]ことは、大和物語からも想像される。したがって私家集が公的役割・政治的役割を果たす場合もあったのだろう。芸能を演じ天皇に献ずるものが賤民――時代矛盾を背負うものであったことはウタについてもいえる。下級官人や受領女たちが天皇や藤原北家の権貴に賀歌や物語を献ずる関係は右の構造とパラレルに存在している。春の冒頭歌すなわち巻頭歌が賀歌になっている伊勢大輔集や、関白頼通に献上すると巻末に記されている赤染衛門集などは献進されるような性格をもっている。

ところが、赤染衛門集には、

うき世にはなにゝこゝろのとまるらむ思ひはなれぬ身ともこそ

なれ群書類従本異同ナシ

というような歌も含まれているのである。赤染衛門という女は紫式部に似た世界をもっていた人である。この一首によって家集中のすべてのウタが消し去られるのであればすごいウタである。だがこの一首以外は歌屑であるというようなはげしさを彼女はもたなかったのかもしれない。

もろともにみる世もありし山さくら人つてにきく春そかなしき

傍記群書類従本

もろともにおきゐるよはの露ならでたれとか秋のよをあかさまし傍記群書類従本

もみぢ見にありきしに、ひとり見しがあかずおぼえしかば

たれにかはつげにやるべきもみぢばを思ふばかりに見ん人もがな

など「もろともに」居れば「慰む」可能性をまだ歌っている（記している）かぎりで、紫式部の世界との差を見せているからである。

紫式部日記の冒頭は、全体を通してかわらない、作者の分裂した状況をみごとに示している。

憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまゐるべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやし。（岩波文庫『紫式部日記』7頁）。

このような自嘲は、現在の「慰め」として「よろづ忘らるゝ」という自己の悩みなき状態から引き起こされる。「かゝる御前をこそ」は、この日記が主家に献上される性格をもつものであったということを示している。主家讃美の修辞ととも受けとれる文脈だが、寡婦となった彼女が華やかな彰子土御門邸にまばゆさと自らのみじめさとを覚えたであろうことも想像される。紫式部についに「慰め」はなく、出仕後身に添ってやまない、ややもすれば慰められる自己を対象化する自己がある。その対象化が文体のうねりを作り出してい

るのである。

和泉式部日記の自嘲表現はどのようなものか。紫式部日記との簡単な比較によって、認識の相違に触れたい。

帥宮の訪れに和泉式部が「つれづれ慰む」[35]ことは多い。ところがすぐに自嘲的表現が出てくるのだ。

れいのつれ〴〵なぐさめてすぐすぞ、いとはかなきや（80頁）

和泉式部日記のいらだちやながめは「つれづれ」慰まぬことに起因する。「もともこゝろふかゝらぬ人にて、ならはぬつれづれのわりなく」（11）「猶ゆふぐれは物ぞかなしき」（72）「人やりならぬ、物わびし」さ（78頁）を掻き消そうとして消せぬゆえに、彼女はまたそれを消そうとしてウタを歌わざるをえないのだ。和泉式部にも「つれづれ慰」めるため我を忘れて帥宮との「仲らひ」に没入する自己を嘆く自己をさらに嘆く（記す・対象化する）ことはできる。

紫式部の自己回帰の視線が「あやし」であるのに対して、和泉式部の視線は「はかなし」[36]である。

たのむべくもなきかやうの（歌の贈答）はかなし事に、世のなかをなぐさめてあるも、うちおもへばあさましう（37頁）

「慰む」とはついに充実した生活を送ることから程遠い。だが「はかなし事に世の中を慰めてある」ことを「あさまし」と対象化するだけ和泉式部の感覚は健康である。

世のつねのこととともさらにおもほえずはじめてものを思ふあしたは

ときこえても「あやしかりける身のありさまかな、故宮のさばかりの給はせしものを」とかなしくて、おもひみだるるほどに、れいのわらはきたり。御ふみやあらんと思ふほどに、さもあらぬを心うしとおもふほどもすぎ〴〵しや（15頁）。

和泉式部日記冒頭に始まる反省的自嘲は、さっきまで帥宮に抱かれていた自己と、故宮と契った過去の記憶に捉われている自己とが交互に現れて来つつ、その異和が深まらぬうちに彼女を押し流す状況――後朝の消息をもっているはずの童――が訪れる。自嘲は自己否定の契機を[37]孕みつつ「もともとこゝろの深からぬ人にて」と肯定されていく。彼女は「つれづれ慰」まない自己を知りながら、紫式部とは異なって、自己の総体を客観化する手だてをもたなかった。というより、そういう志向をもたなかったのである。なぜか。召人として出仕を決意したときも、彼女は、

まめやかなることどもいふ人々もあれど、みゝにもたたず。心うき身なればすくせにまかせてあらんと思ふにも、この宮づかへほいにもあらず、いはほのなかこそすままほしけれ。又うきこともあらばいかゞせむ、（66頁）

と悩むのであるが、和泉式部日記では彼女は愛しまた愛されること

を頼みとして「宿世にまかせて」しまうからである。紫式部は愛したり愛されたりすることで「宿世にまかせて」生きる生き方というものを、近親を始めとする多くの死の体験を通して閉ざしていた。和泉式部には出仕後帥宮が北の方に暇遠になっていくのを、

かたはらいたくおぼゆれば、いかゞはせん、たゞともかくもしなさせ給はんまゝにしたがひて（85頁）

と、日記においては宿世そのものを見つめる条件が希薄である。赤染衛門の生涯を悲しみで裁断したのは夫大江匡衡の死と娘の死であろう。平安朝女流歌人たちの共通の境遇もこうした近親や夫の死に大きな意味がある。和泉式部の場合には為尊・敦道両親王の死と娘小式部の死が想起される。また南波先生が紫式部の「意識基体」の相反する側面のひとつとして夫宣孝の死を論じられている[38]ように、中古女流私家集の歌人たちはその生涯のうちに恋と死とを深くかかえ込んでいるものが多かった。

日記ばかりでなく諸形態の私家集には女たちの実人生が色濃く影を落としている。なぜならば古代のウタはまだ文芸的意図によってのみ歌われ記されたかどうか怪しいからである。また政治的性格からもウタは逃れえていず、むしろ積極的にかかわってさえいるからである。とすれば、そうした面をひきずりながらなお文学的な意志も含めて彼女たちを紙に向かわせたものとはいったい何であるか。それは自分が他の女とは全く違った境遇にあるという自覚である。ところが、事実は逆なのであって、女たちの認識の類同を示すことになる。勅撰集のウタが儀礼的な場においてもつ幇間的性格は、権貴に献ぜられる芸能やカタリと同じ構造をもつ。そのような公の文芸のありように対して、私家集や日記は私の文学へウタの機能を変容させていく過程であったらしい。勅撰集に対する私家集の位置は、その性格を原則的に対比させれば、勅撰集の、

公開・政治・幇間・権威・客観的記述・讃美・規範・固定墨守

に対して私家集では、

秘匿・私性・陰謀・批判・主観的記述・悪口・引用・改変補訂

という、文化における中心と周縁との関係が存在するからである。蜻蛉日記が「あさまし」と叫び、和泉式部日記が「はかなし」と嘆き、紫式部日記が「あやし」と呟く。それぞれの主体の位相がこれらの形容詞に象徴されているにせよ、やはり夫や近親の死によって切り離された自己を発見し、それと向き合った形跡は他の私家集にもありありと覗えて、彼女たちは男のいない世界を発見していくのである。そのことは女が男に繋がれているということを発見していく過程であると同時に、男というものを必要としない女の世界として人間の世界を発見していくことである。女たちは自分の物思い

が慰められるか否かと言いながら、風景における慰藉を漢詩の見たてとは別のコースで発見していった。女たちの願ったことは物思いの慰む世の来ることであった。和泉式部や赤染衛門が仏教に傾斜していくことで自己の救済を果たそうとしたことは特殊ではない。しかしそのような苦悩を、例えば重之女のように「いのちあらばなぐさむおりもありやせんけふだにふべき心ちこそせね」などとは片鱗すら口にせぬ紫式部の思惟もまたあるのであった。

注① 桂宮本叢書私家集九、所収。以下他の家集も特記しない限りこの本に拠る。適宜、漢字・濁点を加えた。
相模集には「もの思ひ」(62 210)「つねよりことに思事」(209、類例222)、その他「思事」の例多数。番号は私家集大成中古Ⅱ 浅野家本。

② 小学館『日本国語大辞典』19巻338頁。

③ 守屋省吾氏「賀茂保憲女と道綱母」『平安文学研究』40輯。「後宮文芸サロンとは無関係な生活に終始した(中略)故に、多くの後宮女房に伍さんがために家集を自纂」したといわれるのも、その孤独においてである。

④ 「女流日記」『改稿版 日本古代文学史』191頁。

⑤ 未発表、大学院講義ノート、一九七四・一一・八。

⑥ 群書類従 正拾五輯和歌 所収。

⑦ 米沢勝代氏は後拾遺集916の「忘られにければ」という詞書から公資と「心ならずも離別の憂目に会った」と考えられている(「相模集の一考察」『女子大国文』49号)。大養廉氏は「ありし日の都の貴公子」への思いゆえにも「彼女の結婚生活は必ずしも多幸な日々ではな」かったとされる(「相模」『国文学』昭42・1)。

⑧ 思女集冒頭「人しれず物思ふ事ありける女の」。相模集の詞書「なにとにかあらん物思ふ女の集とおほえなきことゝも書きいたしてこれみしりたらん残りかきそへてかならすみせよと人のをこせたりしかは」(傍書浅野家本群書類従本)には「思女集」の形成過程が示唆的に記されている。

⑨⑩ 注⑦に同じ。

⑪ 「神明記識 犯者不赦 故有貧窮下賤乞何孤独聾盲瘖瘂愚癡幣悪 至有産不逮之属 又有尊貴豪富高才明達 皆由宿世慈孝修善積徳所致」(岩波文庫『大無量寿経』上巻188頁)。

⑫ 岩波文庫『紫式部集』の八・九番の贈答で、夫の任地下向を「思ひわづらふ人」に紫式部が「露もとまらんことのかたさよ」と答えている。南波先生はここに「受領階層の女性の悲哀」(文庫注)とそれを凝視しつつやはり共に下りなさいと促す紫式部の受領女の運命に対する普遍的認識をみておられる。他者の悲しみを自己の悲しみとするといってもよい。以下引用は同様。

⑬ 高橋正治氏の笠間影印叢刊の解説には本文異同が記されているが、本稿のために特記すべき異同がないので割愛する。以下同様。

⑭ 高橋正治氏(注⑬)も伊井春樹氏(『平安文学研究』36輯)も本院侍従のことがあまり知られなくなったころに集が成立したとされるが、この文脈には本院侍従の記した語感が残っているように思われる。

⑮ 他にも「あまのはら夜半にとひくる鳥なれやなどわが恋をしる人のなき」などがある。

⑯ 「異人となる才と身をもちて」(賀茂女集冒頭)や「赤染が敷島の道は絶えないと言って歌の道を力説しているのは自己の歌に対する強い意識」があるという真鍋恕子氏の指摘(「家集から見た作家の像」『国語と

国文学』昭32・7）など。

⑰ 注③に同じ。

⑱ 小町谷照彦氏「うたびと賀茂保憲女集」『国文学』昭50・12。

⑲ 岩波文庫。榊原本異同ナシ。曽弥好忠に類歌がある。

⑳ 「清少納言と文学」『古代文化』196号。

㉑ 注⑦に同じ。

㉒ 伊藤博氏「紫式部のふるさと」『国語と国文学』昭49・2。「ふるさと」が「自己の存在の根の在りか」であって、『埋れ木』のように巧ちてゆこうとするわが身を見すえつつ、これにあらがうようにみずからことばをつむぎ出し」たところに紫式部の文学営為があるとされる。

㉓ 前出『全講和泉式部日記』467頁。

㉔ 注③に同じ。

㉕ 浅野家本319左注「あさましう思かけずはづかしうこそかきつゞけたれどうるさければとゞめつ」など。

㉖ この部分、群書類従本では「はるけき行さきを見て、かみもゆるさぬ幸ひを、ほしきにしたがひて預り、人もゆるさぬことの葉を、心のまゝに楽しむ。」となっていて、桂宮本よりは禁忌違反の性格が弱くなる。

㉗ 注⑱に同じ。

㉘ 岡崎知子氏『平安朝女流作家の研究』。

㉙ 「年ごろつれづれにながめあかし暮らしつつ、花鳥の色をも音をも、春秋にゆきかふ空のけしき月の影霜雪を見て、その時来にけりとばかり思ひわきつつ……さも残ることなく思ひしる身のうさかな。」の条など。

㉚ 小谷野純一氏「紫式部論序説」『二松学舎大学論集』昭45。

㉛ 「さも残ることなく思ひ知る身のうさかな」（岩波文庫『紫式部日記』45頁）。引用以下同じ。紫式部集で道長法華三十講について南波先生は「陽明文庫本巻末の日記歌(二)の詞書をみると、外部の盛況に解け込みがたい式部の『我』を主体とし、表面は賀歌として詠いながら、心は異質のものをみつめているようである。」（文庫注）とされている。

㉜ 「伊勢大輔集小考」『女子大国文』49号。

㉝ 重之女集では春夏秋冬の部立をもっているが、冬の部立の歌数が他の季節のと同数であることは、古今集のような春・秋への傾斜を必ずしも持っていないことを示している。

㉞ このウタと政治との癒着については藤岡忠美氏「古今から後撰へ」『平安和歌史論』に拠る。

㉟ 清水文雄氏は「この『つれづれ』なる語は、実はこの日記の創作主体の心情をあらわすばかりでなく、さかのぼっては、日記執筆の資材となった贈答歌の詠出主体の心情をもあらわすものである。」（「和泉式部」『中古の歌人』）とされている。

㊱ 清水文雄氏「和泉式部と『はかなし』」『国文学』昭53・7。「和泉式部の文学世界に分け入るための、もっとも重要な指標として、『つれづれ』『はかなし』の二語を挙げ」ておられる。

㊲ 帥宮没後のウタ「はかなしとまさしく見つる夢の世をおどろかで寝る我は人かは」（『続集』）などは強烈である。

㊳ 「紫式部の意識基体」『同志社国文学』5・6合併号。